２０１０／０７／０４　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：あなたは輝いていますか？
聖書箇所：マタイの福音書　５章１４－１６節

私たちはこれまで「ローマ人への手紙」を通して主のすばらしい祝福について学んで来ました。私たちはどれほど罪深い者か、そして、そのような罪人に対してどれ程大きな祝福を主が備えてくだったのか、また、その祝福をいただいた私たちが、その主に対してどのように応答して行くのか、多くの人々がローマ書は「みことばの中の宝」であると言ったように、私たちはそのパウロのすばらしい教え、宝を学んで来たのです。この何週かはローマ書から離れて様々なみことばを学びました。というのも、特に、神ご自身が私自身の心の中に、たくさんの知識を持つことの大切さを教えてくださると同時に、実は、それ以上に大切なものを私自身が忘れていないかどうか、そのチャレンジを与えてくださっているからです。私たちはたくさんの真理を学んで、たくさんの知識を蓄えることができます。でも、皆さん、私たちが最も大切なことを忘れてしまったらその知識は虚しいものです。パリサイ人たちは多くのことを知っていました、しかし、彼らは主ご自身のことを知りませんでした。多くの人たちはたくさんのことを学び、たくさんのことを知っていますが、信仰者一人ひとりが自らに問わなければいけない質問があります。それは「私の主に対する愛は日々増し加わっているかどうか？」です。「私は私の主を昨日以上に今日もっと愛しているか？」です。この質問こそ、私たち一人ひとりが自らに問いかけなければいけない質問であり、そして、これこそが私たちにとって決して忘れてはならない大切な教えであると確信します。

そういう意味で、今日もローマ書から離れてマタイの福音書５章をごいっしょに見たいと思います。マタイの福音書５章１４節をお開きください。よく皆さんがご存じのテキストです。**「:14 あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。:15 また、あかりをつけて、それを枡の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。:16 このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」**、イエスは難しいことを言われてはいません。主イエスはここで私たちに、私たち主イエスを信じる者たちの「身分」と、そして、「託された務め」を教えているのです。私たちはどのような者に変えられたのか、私たちの身分とはどのようなものなのか、そして、主は私たちにどのような務め、どのような働きを託してくださったのか、そのことをこのみことばは私たちに教えるのです。

☆信仰者の身分と働き

Ａ．身分：「光」

１４節を見ると、私たち信仰者は**「世界の光」**であると言います。みことばは私たちに、私たちは信仰生活を重ねて行くごとに、また、ある程度の年数を重ねたことによって、ようやく**「世界の光」**になるとは言っていません。私たちイエス・キリストを信じた者たち、言い換えれば、主イエス・キリストの恵みによって救われた私たち一人ひとりは、もうすでに**「世界の光」**だと言います。それがあなただと言うのです。「光になる」と言っているのではなく、救われているあなたはもうすでに**「世界の光」**なのです。ですから、そのことを私たちはしっかりと覚えなければいけません。もうすでに主イエス・キリストによって救われた私は**「世界の光」**だと。なぜなら、それが救いだからです。主イエス・キリストは暗やみの中にいた私たちをそこから救い出してくださったのです。使徒の働き２６章で、パウロがアグリッパ王の前で自らの救いの証をする箇所があります。パウロはアグリッパ王の前で、自分がどのように救われ、どのような務めを主からいただいたのかそのことを話すのです。その中で特に１８節にはこのように記されています。使徒２６：１８**「それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中にあって御国を受け継がせるためである。』」**と、パウロはこのように主からのことばを語りました。パウロ自身が神の奉仕者として証人として出て行って、人々の前でこの救いのメッセージを語るのです。そして、そのメッセージによって、人々が暗やみから光に、サタンの支配から神の支配へと立ち返るのです。かつて、私たちはみな例外なく、この暗やみの中を、罪の中を生きていました。しかし、感謝なことに、私たちが何かをしたからではなく、神ご自身が私たちに救いの手を差し伸べてくださって暗やみから私たちを救い出してくださったのです。かつては、すべて例外なくみな、サタンの支配下にあった私たちを、神は一方的に手を差し伸べてその支配下から私たちを救い出してくださったのです。これが救いです。

こうして、私たちはこの「救い」というすばらしい祝福の中に招き入れられたのです。私たちは確か

に、主イエス・キリストが言われたように**「世界の光」**です。以前の訳では、これは「世の光」です。私たちは少なくともそのような存在として生まれ変わったのです。そのような存在としてあなたは救われたのです。

Ｂ．務め：「働き」

二つ目に、主イエスはここで「光である者たちの務め」について話しています。「光としての務め、光として働き」です。

１．光としての働きを通して暗闇の中にいる人々を主へと導く

ａ．光として生きる

パウロはエペソ人への手紙５章で、この光に対して、また、光の子どもに対してこのように教えているところがあります。５：８－１０**「あなたがたは、以前は暗やみでしたが、」**、今、私たちが見てきたことと同じことをパウロは語ります。**「今は、主にあって、光となりました。」**、救われたということです。**「光の子どもらしく歩みなさい。」**、神の恵みによって救われた一人ひとりは、光として生きて行くという大きな責任を主からいただいているのです。**:9 ――光の結ぶ実は、あらゆる善意と正義と真実なのです。――:10 そのためには、主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。」**、パウロはここで私たち信仰者に、あなたは救われた者として新しい生き方が始まった、その生き方とは私たちが何をしたいのかではなくて、何が主に喜ばれるのかを考えて、その主に喜ばれることを選択して行きなさい、そのような生き方を実践する者へとあなたは変わったのだ、それがクリスチャンだと教えるのです。だから、私たちはこの主イエス・キリストの救いをいただいていない人たちとは明らかに違うのです。

１９世紀の有名な神学者 J.C. ライリーは「もし、我々が本当のキリスト者なら、我々の性格において特有の、他とはっきりと区別される印があるはずである。」と言いました。考えてみてください。私たちが神の恵みによって救われているなら、本当のクリスチャンであれば、私たちの性格において特有の他と全く違う印が私たちの内にあるということです。私たち信仰者は世の中の人々とは違うのです。この救いをいただいていない人々とは違うのです。だから「光」なのです。私たちは暗やみの中にいるのではありません。私たちは「光」として新しく生まれ変わって、新しい歩みをする者となったのです。

どうですか？皆さん、あなたの周りにいる多くの人々、あなたの家族かも知れないし、あなたの同僚かも知れないし、あなたのクラスメートかも知れない、みんなはあなたの違いを見ていますか？気づいていますか？あなたが「私はクリスチャンです。」と言った時にみんなは驚きませんか？「あなたがクリスチャンだなんて全然知りませんでした。」と言われるとしたら悲しいですね。私たちが本当のクリスチャンなら「あなたは他の人たちとはどこか違うと思っていました。やっと分かりました。」と言われるはずです。神が為さったみわざは私たちを生まれ変わらせてくれたことです。主を知らない者たちとは違うのです。

ｂ．光の子として生きるとは？

では、私たちが「光」として歩んで行く歩み方とはどのような生き方なのでしょう？この度のアメリカ訪問は飛行機に乗っている時間も長かったし、車を運転している時間も長かったです。時には８時間も一人で運転することもありました。いろいろなことを考えます。私は車を運転しているときに往々にして一人で説教しています。そうするといろいろな思いが繰り返して出て来るのですが、「光の子どもとして生きる」とはどういうことでしょう？そうすると、私たちがすでに学んだみことばへと導かれて行きます。それはある律法の専門家がイエス・キリストのところに来て質問した箇所です。ルカの福音書１０：２５－３７（並行箇所マタイ２２：３７－４０、マルコ１２：２８－３１）です。**「何をしたら永遠のいのちを自分のものとして受け取ることができるでしょうか。」**（ルカ１０：２５）と彼は言いました。一番大切な戒めとは何でしょう？神の命令の中で一番大切な命令とは何でしょう？「神を愛すること、そして、自分と同じように、隣人を愛すること」です。すべてがそこに戻って行くのです。だから、私たちが自らに問いかけなければいけないことは、「私の主に対する愛は、隣人に対する愛は増し加わっているかどうか」です。ご存じのように、律法の専門家のこの問いかけ（２５節）に対して、イエスは**「律法には、何と書いてありますか。」**と言われました（１０：２６）。それはこの律法を守ることができるということを言わんとしたのではなくて、「私はこの律法を守っているのです」と信じ込んでいたこの律法の専門家に、「実は、守れないですよ。あなたは守っていると思っているけれど、実は、神の基準からははるかに外れていますよ。」ということを悟らせるためでした。

なぜなら、「私は神さまを愛しています」とクリスチャンならみなそのように言うでしょう。でも、神が望んでおられるように神を愛しているかと言うと、それは別の問題です。なぜなら、神が望んでおられるのは、私の考えることも思うことも想像することも私の動機も、そのすべてが神に喜ばれなければならないのです。そのような愛で神を愛せますか？私たちはすぐに神のことよりも自分のことを考え

てしまいます。神が喜ばれることは何かよりも自分がやりたいことが何かを考えてしまいます。どんなに強い意志を持っていても、神が要求している完全な愛をもって神を愛することは私たちには不可能です。だから、救い主が必要だったのです。なぜなら、私たちは永遠のいのちをいただくためのその神が示された基準から余りにも外れているからです。そして、どんなに努力してもその基準に到達することはないのです。だから、神が私たちに救いの手を差し伸べてくださって、どうすることもできない私たちをその罪から永遠の滅びから救い出してくださったのです。これが救いです。

２．神を愛する者として歩む

　でも皆さん、神を愛することと隣人を愛することは神が望んでおられることです。救いを得るためではありません。救われた者として、私たちは神が望んでおられることだからそのように生きて行こうとするのです。これまで以上に神を愛する者として、これまで以上に私たちの隣人を愛する者として。だから、私たちは問いかけなければいけないのです。信仰歴が何年であろうと、昨日より私は神に対する愛が増し加わっているのかどうか、隣人に対する愛はどうなのかと、その問いかけをしなければいけません。

◎「愛」：主が望んでおられるように愛をもって生きているか？

１．主を愛する

　「神を愛すること」に関して私たちはもうすでに学んでいるのでよく知っています。二つのことがあります。一つ目は神のみことばに忠実に従うこと、神の命令に従って行くことです。二つ目は主が喜ばれることを行なって行くことです。みことばに従うこと、聖書のみことばに従うこと、それが神を愛することです。

ａ．みことばに従う

　兄弟姉妹の皆さん、私たちは変わらなければいけません。どのように変わる必要があるのでしょう？私たちはいつも何かをしようとするときに、それに関して神のみことばが何と言っているか？それが神の前に正しいのかどうかを考えて祈って、そして、選択しようとします。そういうことを互いに言い合う者たちにならなければいけない、そういうことを互いに言い合う群れにならなければいけないのです。それを妨げるものは何でしょう？「いや、私たちはそのようなことは今までやっていない、やって来なかった。」と言って、今までやって来た様々な行ないが果たして聖書通りなのかどうかを吟味することなく、時には、それをみことば以上に重視してしまうことです。だから、私たちは今までやったことがないとか、やって来なかったなどと言わないで、それが神の前に正しいことなのか、神に喜ばれることなのかどうかをいっしょに考えることです。そのような信仰者に変わって来なければいけないのです。なぜなら、今、見て来たように、神のおことばに徹底的に従うことが神を愛していることの証なのです。私たちに必要なことは、神のおことばを正しく学び、そのみことばに従うことです。

　なぜ、そのようにするのでしょう？神を愛しているからです。私たちが「神を愛している」と言うなら、私たちはそれを問いかけなければいけません。本当に「みことば」という権威に私は服しているのかどうか、従順であるかどうかです。私たちのやって来たことや私たちの考えはどうでもいいのです。アメリカ旅行中、先週の月曜日からのことですが、イリノイ州シカゴから約２時間半ぐらい南に下った所に、スプリングフィールドという州都があります。アブラハム・リンカーンが生まれ育った所です。そこで約５００人位の牧師たちとその伴侶が集まってカンファレンスが開かれました。今回のテーマは幾つかあったのですが、メインのテーマは「みことばに立とう!」でした。もう一度、みことばに対して持っていたその熱意を取り戻そう！というのです。聞いていて、どこの国でもいっしょだなと思いました。どの時代でも、キリスト教会がずっと戦い続けて来た戦いは、「異端との戦い」も確かにあるのですが、それ以上に、教会の中にいつの間にか世の中の知恵や考えが入り込んでしまうことです。そのようなものが教会のみことばへの純潔さを奪っていってしまったのです。

　恐ろしいことに、キリスト教の歴史の中でどの時代にもそれが起こっています。聖書のことばよりも世の中の常識を優先してしまったり、世の中の考え、知恵を優先してしまう、今、私たちが見て来ているように、神を愛するということはそのようなものを廃絶して､徹底的に神のみことばに立つことです。世の中が何と言おうと、私たちの責任は神に対してのものです。聖書のことばが言うことはそれが絶対なのです。なぜ、そこまで徹底的にするのでしょう？神を愛する者として生まれ変わったからです。そして、神を愛する者の生き方とはそのような生き方であることを、聖書が私たちに教えてくれるのです。だから、私たちは自らに問いかけなければいけないのです。私はどのように生きているのか、そこまで徹底して神のおことばに従おうとしているか？と。私はそのチャレンジを神からいただきながら、自分の不信仰を反省します。そして、神のおことばにもっと従う者になりたいと思います。恐らく、皆さんもそのような願いを持っておられることでしょう。そのように期待します。それなら、そのような思い

を持って今日から歩んで行きましょう。
　私たちも気をつけていなければ、神の前に、確かに形は喜ばれることをしていても、いつの間にか心が伴っていないことがあるでしょう？「何のためにそれをしているのですか？」と問われることが一番いやです。なぜなら、私たちはこれまでやって来ていることを継続してやって行くことは非常に楽だからです。私は今でもその姉妹のことを愛していますし、その姉妹が悪いという意味ではありません。かなり前、婦人会でのことですが、このような質問を受けました。「今年も『伝道』をテーマにやって行っていいですか？」と。非常に単純ですばらしい質問です。そこでこんな質問をしました。「ちょっと聞いてみますが、何のために婦人会があるのですか？」と。答えは「これまでずっとやって来ました。」でした。皆さん、そのようなところに陥ってしまうことがあるのです。「ずっと礼拝に来ているから礼拝に来ています。ずっと祈祷会に来ていたから来ます。壮年会、婦人会にずっと参加しているから参加します。」と…。私たちが覚えなければいけないことは「何のためにやっているのか」です。もし、私たちが神を愛するゆえにやっているのでなければ、その行為は人から見てどんなにすばらしいものであっても、悲しいことに、神はお喜びにならないのです。
　旧約聖書の一番最後にマラキ書があります。マラキ書１章を見ると、祭司たちは神の前に祭壇を築きいけにえをささげていましたが、その行為を神はお喜びになっていません。１：６**「子は父を敬い、しもべはその主人を敬う。もし、わたしが父であるなら、どこに、わたしへの尊敬があるのか。もし、わたしが主人であるなら、どこに、わたしへの恐れがあるのか。――万軍の主は、あなたがたに仰せられる。――わたしの名をさげすむ祭司たち。あなたがたは言う。『どのようにして、私たちがあなたの名をさげすみましたか。』と。」**７節には**「あなたがたは、わたしの祭壇の上に汚れたパンをささげて、『どのようにして、私たちがあなたを汚しましたか。』と言う。『主の食卓はさげすまれてもよい。』とあなたがたは思っている。」**と続きます。時間の関係で全部は読みませんが、確かに、あなたがたの行為は見た。祭壇を築きいけにえをささげている。しかし、神はその行為をお喜びにならなかったのです。なぜなら、彼らには神の前に最も大切な神に対する愛、神に対する尊敬がいつの間にか失われていたからです。
　そうすると、私たち信仰者が考えなければいけないことは、これまでと同じことを繰り返しているばかりで、いつの間にか、かつてもっていた神に対する愛が冷え切っているという、そのような信仰者になっていないかどうかということです。何のために礼拝に来て、何のためにみことばを学び、何のために主を崇めながら日々歩んでいるのでしょう？主イエス・キリストは宗教者を生み出すためにいのちをささげられたのではないのです。主イエス・キリストは、イエス・キリストに従う者たちを生み出すためにいのちをささげてくださったのです。主イエス・キリストに従う者たち、神のみことばを愛し、このみことばに徹底的に従って行く者たち、そういう人たちが世界の光なのです。そういう人たちを人々が見る時に「彼らは違う」のです。なぜなら、彼らは世の中の基準に従って歩もうとしていないし、世の中の価値観を自分たちに適用しようともしていないからです。彼らのただひとつの願いは「神が喜んでくださること」です。神が喜んでくださることをして行きたい、そのことにおいて徹底的に従い、そのように歩んでいる、それが神を愛することです。私たちはそのような歩みをしているかどうかです。私たちの心は神に対して感謝に溢れているかどうかです。私たちの心はこの神に対する恐れに満ちあふれているかどうかです。それとも、ただ何となくこれまでと同じことを継続していませんか？
　奉仕の働きも、どんなに数多くの集会を開こうと、どんなに数多くの個人伝道をしようと、日曜学校をしようと何をしようと、私たちの心が私たちの愛が神の前に冷え切っているなら、神はお喜びにならないのです。私たちはかつての人間的な栄光にしがみつくのではないのです。すべて神の恵みによってさせていただいたことです。問題は今であり、これからです。「世界の光」として生まれ変わった私が「世界の光」として生きて行くのかどうかです。
ｂ．主が喜ばれることを行なう
　私たちが主が喜ばれることを行なってゆくということは、言い方を変えるなら、主が憎まれることを私たちが嫌い、憎むことです。コリント人への手紙第一の中で、「愛とは何か？」を教えた有名な箇所で愛の定義がされていますが、１３：６に**「不正を喜ばずに真理を喜びます。」**とあります。これが愛だと言うのです。ということは、愛とはだれかが罪を犯していても見て見ぬふりをすることではないのです。なぜなら、神は不正を喜ばれないからです。神を愛する者は神が喜ばれることをし、神が憎まれることをしない者です。ですから、兄弟姉妹が罪を犯していたら、私たちははっきりと「それは違う」と伝えることが愛です。だから、私たち信仰者が神の前に罪を犯すと神は何をされますか？私たちを矯正されます。私たちにスパンキングを与えて正しい方向に戻るようにされます。聖書のみことばは何と教えていますか？Ⅱテモテ３：１６**「聖書はすべて、神の霊感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。」**です。聖書が為す働きは、私たちが間違った方向から正しい方向へと歩んで行くよう

にすることです。ですから、神が為そうとする働きは私たちがいつも正しく歩んで行くようにすることです。それが愛なのです。私たちも神を愛するゆえに、神が愛されるものを愛し、神が憎まれるものを憎む者として歩んで行くのです。「神を愛する」、余りにもハードルが高いです。しかし、私たちはその目標に向かって、少しでもこの神をより愛する者として変えられることを願いながら、日々主の助けをいただきながらみことばに従って行くのです。

２．人を愛する

「人を愛すること」と「神を愛すること」とは非常に密接に関係しています。別の言い方をするなら、神を愛する人は人を愛する人へと成長して行きます。ヨハネの手紙第一の中で、ヨハネが非常に大切なことを私たちに教えています。何度もこの箇所を言うのは、その教えが明確に示されているからであり、そして、私自身が非常に教えられているからです。４：１９を見てください。**「私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。」**、私たちはアガペーの愛をもって互いに愛し合っている。なぜなら、神がまず私たちをアガペーの愛で愛してくださったからです。ですから、神の愛をもって人を愛することができるためには、まず神の愛を自分自身が受け入れていなければいけません。神の愛を受け入れた者たちはその愛をもって人を愛することができる者たちへと変えられたのです。みことばはそのように教えてくれるのです。その後を見てください。２０－２１節**「:20 神を愛すると言いながら兄弟を憎んでいるなら、その人は偽り者です。目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。:21 神を愛する者は、兄弟をも愛すべきです。私たちはこの命令をキリストから受けています。」**非常に単純明快です。「神を愛すること」と「隣人を愛すること」は切り離すことができないのです。D･L･ムーディはこのように言います。「神の愛について学べば人々を愛するようになって行く。」と。彼はあるチャレンジを受けるのです。それは聖書の中から神がどんなに私たちのことを愛してくれているのかを学ぼうとし、その学びを始めたムーディは、神の愛が分かれば分かるほど「私は人に対して善を施したくなって行く。人に良いことをしたいと思うようになって行く。」と言います。神の愛が私たちを変えるのです。そして、神の愛を私たちは実践する者に変えられて行くのです。それが人々に対する愛という形になります。愛し合うことは主のみこころに適っています。

ローマ人への手紙１３：８－１０では**「だれに対しても、何の借りもあってはいけません。ただし、互いに愛し合うことについては別です。他の人を愛する者は、律法を完全に守っているのです。:9 「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな。」という戒め、またほかにどんな戒めがあっても、それらは、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」ということばの中に要約されているからです。:10 愛は隣人に対して害を与えません。それゆえ、愛は律法を全うします。」**、非常に強烈なみことばです。**「愛は隣人に対して害を与えません。」**と。ということは、もし、私たちが人に対する非難を口にするなら、このみことばに照らし合わせてみるなら、それは愛の行為でしょうか？なぜ、私たちは非難を口にするのでしょう？心に怒りがあるからではありませんか？人に対して怒りや憤りをもっているなら、それは必ず形となって現われます。私たちはなぜ、いろいろな人の噂を聞いたときにその事実関係を確認しないで、他の人にその噂を話すのですか？私たち信仰者にそのようなことが決してあってはなりません。それは神を愛する行為ではないからです。それは毒を蒔く行為です。ことばに関しても、言っていることは正しいかも知れないけれど、きついことばで言うなら、それは悲しいことに神はお喜びになりません。

ソロモンはこのように言っています。箴言１５：１**「柔らかな答えは憤りを静める。しかし激しいことばは怒りを引き起こす。」**。かなり前のことですが、ある集まりがあって、そこで数人の人たちが話し合っているその場に私もいっしょにいました。ミーティングでしたが、そこに座ってその会話を聞いていたのですが、それは非常に聞くに耐え難いものでした。余りにもことばがとげとげしかったのです。そこに座っていて段々不快になって来ました。別の言い方があるに違いないと思いました。それで、そのミーティングが終わってからその兄弟のところに電話をしました。「これから行ってもいいですか？」「いいですよ。」と、「実は、今日の話し合いの中であなたが話しておられたその話し方は、私は聴いていて非常に辛かったです。」とそのことを正直に話しました。感謝なことに、この兄弟は神を愛しておられたゆえに、「私は間違っていました」と言われ、いっしょに祈って神を称えて別れました。話しているその内容が正しくても、もし、私たちの口からそのように人が耳を覆いたくなるようなことばが出て来るなら、私たちは気を付けなければいけません。

信仰者の皆さん、私たちは「世界の光」として生まれ変わり、「世界の光」として世の中の人たちにこのすばらしい主の証を為す者として生きているのです。私たちの口から決して悪いことばが出て来てはならないのです。残念ながら、どんなに注意していてもそのようなことが起こります。もし、そうなら、私たちはそのことを謝罪することです。「兄弟、私は罪を犯しました。祈ってください。神に喜ばれることをして行きたい。」と。なぜ、そこまでするのですか？神を愛するからです。神がそのように

望んでおられるからです。神がお喜びになることだからです。パウロはこのようなことを言っています。エペソ４：２９**「悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。ただ、必要なとき、人の徳を養うのに役立つことばを話し、聞く人に恵みを与えなさい。」**。信仰者の皆さん、このような人になりたいと思われませんか？このような人の傍にいるなら楽しくて仕方ない。いつも口から悪口や非難などが出て来る人の傍にいると辛くて仕方がない。しかし、神への賛美が出て、そのことばが人々を励まし、主に喜ばれることをいつも語ろうとしている人たち、失敗したらそれを神の前に告白して、神の前に正しいことをしようとしている人たちの傍にいることは祝福です。

今回、牧師のカンファレンスに出席して一番祝福されたこと、それは一年ぶりに会った牧師たちが「あなたの働きのこと、あなたの教会のことを祈っていましたよ。」と声をかけてもらったことです。もちろん、私もその方々を見てどこかでお会いしたと気付くのですが、彼らは祈ってくれていたのです。ある一人の兄弟はこう言うのです。「私はずっと月曜日にあなたのことを祈る決心をしています。」と。同じ思いをもち、神を愛するゆえに神に喜ばれることをしたいとしている人たち、そのような人々の傍にいることは祝福です。そこで皆さん、私たちが考えなければいけないことは、神はあなた自身がそのような人になることを望んでいるということです。あなたがそういう人に変えられて行くことを神は望んでいるのです。私たちの教会がもし最悪の教会になるとするなら、それはこういう教会です。一人ひとり、みなが自分のことばかりを優先すること、それは最悪の教会です。各人が他の人の必要を満たすことよりも自分の必要を満たすことを優先する、最悪の教会です。人を助けたり励ましたりするよりも、自分が助けられ、自分が励まされることを優先する、最悪です。なぜなら、自分のことしか考えていないなら、自分の思い通りに物事が進まないとすぐに怒ってしまうからです。憤ってしまうのです。それをすぐに神の前に悔い改めて解決しなければ、それはいろいろな形で毒となって出て来ます。悪口であったり中傷であったりと…。そして、私たちは光として祝福をもたらす者として救われ生かされているにも拘わらず、却って、私たちは人々をその毒によって汚染してしまうような働きをしてしまうのです。私たちはそのような人になってはいけないのです。そのようなところから私たちは救われたのです。かつてはそうして生きていました。自分のことを最優先して、自分を愛して。でも、私たちは救われたのです。イエスの救いの招きをもう一度思い出してください。ルカ９：２３**「イエスは、みなの者に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」**、同じルカ１４：２７にも**「自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。」**とあります。「私…、私…、私…」という生活はもう終わったのです。生まれ変わった私たちは、今度は「神さま…、神さま…、神さま…」と神が喜ばれることは何か、神が望んでおられることは何かと、ゆえに、いつもみことばに照らし合わせて、何が神の前に正しいのかを考えて、その選択をして行くのです。これが救われた者です。

結論：

主イエス・キリストは私たちに言われました。弟子たちに言われたのです。「あなたがたは世界の光です。」と。この暗やみの中にあって、希望の全くない私たちのこの国にあって…。信仰者の皆さん、今、この国では毎日９０人以上の人たちが自殺しているのです。何の希望もなく、永遠の滅びへと向かっているのです。その責任は私たちです。私たち信仰者が「世界の光」として輝いているなら、少なくとも、私たちはその人々に対して、希望があるメッセージを、ことばだけでなく私たちの生き方をもって明らかにすることができると思いませんか？そのために神はあなたを救い、そのためにあなたを生かしてくださっているのです。私たちはこの地上にあって、私たちを明らかにしようとか、人々に誉めてもらうために私たちを自慢しようとするのではないのです。私たちがすることは、私たちの神こそが真の神であり、この方こそが私たちをお造りになった方であり、ゆえに、私たちにはちゃんと目的が存在すること、この方には人を生まれ変わらせる力があること、この方は約束を必ず守られる方であり、そして、この方だけが罪の赦しを与えることができる、永遠のいのちを与えてくださる救い主であること、そのことを私たちはことばをもって、行ないをもって明らかにして行くのです。Ｉペテロ３：１５にはこのように記されています。**「むしろ、心の中でキリストを主としてあがめなさい。そして、あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしていなさい。」**と。そのためにあなたは救われたのです。皆さん、そのように生きていますか？「神を愛すること、隣人を愛すること」。

あのエペソの教会を思い出してください。すばらしい教会でした。黙示録２章に出て来ます。私たちも学んだことがあります。このすばらしい教会は、偽りの教えが入り込んで来ても、彼らはそれをちゃんと見抜きました。そのことを主ご自身が誉めておられます。しかし、**「しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。」**（黙示２：４）とも言われています。見た目はすば

らしい教会、教理的にもしっかりした教会です。しかし、最初の愛から離れてしまったと。その後を見てください。２：５**「それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。」**とあります。もし、あなたが悔い改めるなら、わたしはあなたをわたしの証人として使い続けるけれど、もし、あなたが悔い改めないで歩み続けるなら、わたしがあなたに託した大切な働きからあなたを外そうと言うのです。なぜなら、役に立たないからです。塩気をなくした塩のように、光り輝いていないランプのように本来の目的から外れているのです。役に立たないのです。

ですから、Ⅱテモテの中で、パウロは大きな家にある器のことを話しています。金や銀の器と木や土の器のことです。Ⅱテモテ２：２０－２１を見てください。**「大きな家には、金や銀の器だけでなく、木や土の器もあります。また、ある物は尊いことに、ある物は卑しいことに用います。」**、**「卑しいことに」**とは汚いことです。ときに、木や土の器はゴミを集めたりしますが、その器はゴミとともに捨てられることもあるのです。なぜなら、価値がないからです。**「:21 ですから、だれでも自分自身をきよめて、これらのことを離れるなら、その人は尊いことに使われる器となります。すなわち、聖められたもの、主人にとって有益なもの、あらゆる良いわざに間に合うものとなるのです。」**、パウロが言うことは、もし、あなたが罪から離れて神の前に正しく歩んで行こうとするのなら、神は「わたしはあなたをわたしにとって役立つ者として用いる。」と言われるということです。神にとって役立つ者として私たちは使われるのです。しかし、条件があります。私たちは神の前に聖くなければいけない、正しくなければいけません。私たちが罪を抱えて、その罪から離れようとしないなら、あなたの心が罪によって支配されているなら、悲しいことに、神はあなたを大切な務めに用いることはできないと言うのです。

「聖められたもの」、そのようなものから完全に離れなさい、そのような罪をあなたから除きなさいと言うのです。かつての生き方から離れなさい。神が喜ばれる生き方を、神の助けをいただいて実践しなさいと言うのです。そうすると、**「有益なもの」**、つまり、神にとって役に立つ器になるのです。だから、皆さん、私たちには選択があるのです。神にとって役に立つ者として生きて行くのか、それとも役に立たない者として生きて行くのか…。私は役に立つ者として生きて行きたいです。

この間のカンファレンスで、ある一人の牧師が牧師たちの間で祝福をされていました。何十年間牧会をされたのか分かりませんが、壇上に呼ばれました。見た目は８０歳以上です。杖を突きながら奥さんに支えられて、また、人々の手を借りながら壇上に登り、講壇の前に立ちました。何十年にも亘る忠実な働きに対して一枚の額が送られました。「忠実な働き人」と。その牧師は最後にこのようなことを言われました。「私は最後まで、最後まで忠実に働き続けて行きたい。」と。　ちょうど、パウロが言ったように、「最後まで、忠実に走り続けて行きたい。」、それが彼のメッセージでした。

信仰者の皆さん、私たちは「世界の光」として救われたのです。神はあなたに大切な務めをくださったのです。その務めを果たすように願って忠実に走っていますか？人生を無駄に過ごしていませんか？罪に対していい加減な態度を取っていませんか？主を知らない人が教会の中に入って来たときに、皆さんの中に、教会の中に、キリストの愛を見ますか？正直に言って、私もここに長く居ます。ある時はキリストの愛が全く感じられないときがありました。冷たい、批判し合う、さばき合うという…。私たちは神を愛する者として生まれ変わり、隣人を愛する者として生まれ変わったのです。それを実践しないことには、光を輝かせることはできないのです。問題は、そのような者として今日から歩み始めるかどうかです、皆さん。

だから、私たちは今から聖餐式をします。確かに、聖餐式は特別な儀式です。しかし、この儀式に特別な力があるとは思っていません。このときは自らの信仰の吟味の機会です。私の心を吟味するのです。主の前に間違ったことがないか、罪がないか？そして、罪があればそれを神の前に告白して、そして、私たちは私たちの誇りであるキリストの十字架とあの復活の象徴であるパンと杯をいただくのです。もし、心の中に罪があり、その罪を解決しようとしていないままに、このパンと杯が回って来たときに、皆さんがお取りになるつもりなら、お願いします、「お取りにならないでください。」。神は厳しい警告を発しています。なぜなら、だれひとり、私たちは神をだますことはできないからです。

心から願うことは、もし、罪があれば神の前に告白することです。「主よ、どうぞ、私の行ないも、私の考えも、私のことばも、私のすべてが、あなたに喜ばれるように私を聖めてください。」と、その決意をもってこの聖餐式に着くことです。